碧玉色の王子と赤き魔女

皐月しずは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧玉色の王子と赤き魔女

【Ｎコード】
Ｎ６４３７Ｉ

【作者名】
皐月しずは

【あらすじ】
エルベリートはラクノア城に住み込みで働く少年。容姿端麗だが、ナルシストで性格が悪いのが玉にキズ。
告白を経て、メイドのリネアと漸く恋仲になれた。
二人の時間はこれから始まる。
穏やかで平和な日々は続くものと思っていた。
そんな二人に忍び寄る暗雲。
はたしてエルベリートはリネアを守ることが出来るのか。

※別ＰＮで年齢制限あったものの内容をＲ－１５にして再投稿しています。

登場人物紹介

・主な登場人物・

Ｌａｑｕｎｏａ：ＳＩＤＥ
エルベリート（１７？）♂
主人公。魔族が住まうラクノア・ヴァロスの王直属の４幹部の一人。宮廷魔術師ヒューレイストの部下。ギルドから派遣されたがエリート昇進したのもあり、ナルシストでプライドが高く、性格が悪い。手鏡を持ち歩き、常に身だしなみを気にしている。

リネア（？）♀
ヒロイン。エルベリートに仕えるメイド。横柄な態度のご主人様に頭を悩ませる苦労人。明朗快活な少女。背伸びしたがりやで、おしゃれ好き。何かとお姉さんぶるため、エルベリートはそれが気に入らない。

アゼレア（１６）♀
ヒューレイストの妹。生まれつき病弱で、あまり外出すら許されていない。おっとりとしているが、芯が強く、しっかり者。エルベリートのことが気になっており、兄に頼んで療養所から期間限定だがラクノア城へとやって来た。

ヒューレイスト（２３）♂
ラクノア・ヴァロス王に仕える４幹部の一人で、宮廷魔術師。エルベリートの上官。

物腰が柔らかく落ち着いている。

アークフォルト（２１）♂
亡き父に代わり、参謀や４幹部たちの協力を経て
２０歳でラクノア・ヴァロスの王として即位した
若き王。
いつもお供にヒューレイストが仕えている。
王様気質で偉そうな性格だが、国民思いであり、
先を見据えて行動できることから人望も厚い。
生き別れた兄が一人いる。

セシオス（１７）♂
アークフォルトの弟。４幹部の一人。
同僚のエルベリートとは年が近いのもあり、仲が良い。
気さくな性格で飄々としている。
まだ恋愛には興味がなく、友情第一である。
リム（１３）♀
ラクノア４幹部の一人。控えめで大人しい。小柄な為それを気にしているがエルベリートは妹のように可愛がる。
メレニー・フェルト（？）♀
ラクノア城に踊り子として仕えるお色気少女。
ソーニャ・ビアンディ（？）♀
ラクノア城にヒューレイストの付き人として仕えるえんび服の少女。

序章

魔法と剣で繁栄されている世界、ラ・セレベージュ。
その遥か北に聳える城塞都市、ラクノア＝ヴァロス城に
住み込みで働く少年がいた。
彼の名はエルベリート。
蒼がかった碧の髪。彼の瞳はオッドアイで、澄んだ海のような青い
瞳、冷酷な氷の瞳を併せ持つ。
容姿端麗の美しい少年だ。性格は少々難ありだが・・・。
ラクノアの紋章の刺繍のケープと華美な衣裳はまるで王子を思わせ
る。
しかし、エルベリートはこの国の王子ではない。この国の王子はア
ークフォルトという
二十歳位の青年であったが、２年前に即位し現在は若き王として国
を治めている。
エルベリートは、彼直属の四幹部の一人として仕えているのだ。

「さて、今日はここまでにしよう。」大量の書類を整え終え、大き
く伸びてリラックスする。
コンコン
「リネア？入っていいよ。今は誰もいないから。」
カチャ・・・。
「エルベリート様、お茶をお持ちしました。」
ドアを開けた先にはメイドのリネアがいた。
桜色の髪に朱色の瞳の、背はエルベリートの耳辺り位の高さのスタ
イル抜群で
明朗快活な少女だ。黒と白を基調とした地味なメイド服を着ているが
美人な彼女は何を着てもよく似合う。
「リネア。今はエルベでいいよ。うん、いい香りだ。

少しは腕をあげたようだね。」
「エルベに食べてもらいたくて、でも・・・。」
リネアは何かを隠しているらしい。
「何を隠しているんだよ。」
「何もないってば！ほら、紅茶が冷めちゃう。」
「いや、何か隠してるだろ。見せてよ。」
エルベリートが手を差し出すとリネアはしぶしぶ隠していたかわいい包装の包みを
渡した。
「あの、捨てちゃっていいからねっ！」
エルベリートは包みを開けると甘い香りがいっぱいに広がる。
リネアがエルベリートから包みを取り上げると間が悪かったのか
床に落ちて中身がこぼれてしまった。
「あっ・・・。」
お世辞にもクッキーとはいえない、いびつなそれがエルベリートの
目に留まる。
「これ・・・。おまえが作ったのか。」
エルベリートがクッキーを拾い上げる。
「捨てちゃって！こんなもの食べられないって、わかってるんだからっ！」
リネアはこぼれたクッキーを片付けている。
「リネア。その包み、貸してよ。」
「・・・。」
「まだ中身が無事なものだって残ってるだろ。」
エルベリートが包みからクッキーを取り出し、一つ口にほおばった。
「・・・まずくはない。見た目は良くないけど。」
「だから、捨ててって言ったのに・・・。」
「リネアがオレのために作ってくれたんだ。食べられるのが残っていて良かった。」
エルベリートがリネアを見つめる。

「有り難う・・・。いつも高級なお菓子を食べているから、こんなもの食べてくれないって
思っていたから・・・。」
「まあ、確かにいつものものとは比べる価値もないけどね。」
「じゃあ食べなきゃいいでしょ！」
「食べてみたかったんだ。リネアの手作りクッキー。」
エルベリートがリネアに顔を近づける。
「んっ・・・。」
エルベリートの唇がリネアに重なる。
まだクッキーの甘い香りが残っている。
「これからもオレにクッキーを焼いて。」
エルベリートが甘くささやくとリネアは頬を赤らめた。
「はい・・・。」
リネアはこくりと頷く。
二人がクッキーのことで夢中になっている間に紅茶はすっかり冷めてしまっていた。
「せっかくの紅茶が冷めてしまったね。クッキーもいただけたし、オレは
部屋に戻るよ。」
エルベリートは冷めてしまった紅茶を一気に飲み干してしまった。
「じゃあ、私も仕事に戻るね。まだ洗濯ものが残っているから。」
「ああ、あまり無理はするなよ。」
リネアは会釈して執務室を後にした。
エルベリートも部屋の鍵をかけ、自室に戻っていった。
そんな、たわいのない日々がこれからも続くのだと、エルベリートは思っていた。
そして、少しずつ二人の距離は縮まっていくだろう。
やっと、あの女を忘れることができる。
ー漸く、開放されるのだと。

しかし、その時間は長くは続かなかった。

第1章　再会

ラクノア城の中庭。
エルベリートは一人の少女に呼び出されていた。
「何のよう？オレは忙しいのだけど。」
エルベリートは見ず知らずの女に呼び出されて、かなり不機嫌である。
「あの・・・え・・・えーと。わたしはアゼレアです。えーと・・・。」
朱色の髪の華奢な少女はおどおどしている。リネアより髪は長く、一部みつあみにして
後ろでまとめて下ろしている。お嬢様ヘアーのかわいらしい少女である。
肌の露出の少ないゴシック系の服を着ているが、病弱ゆえだ。

「あのさ、用がないならオレはもう行くよ。」
「用ならあります！そのためにお呼び出ししました！」
エルベリートが立ち去ろうとする、その腕をアゼレアが掴む。
「悪いけど、手離してくれない？話聞くから。」
アゼレアはエルベリートの腕を離そうとしない。
「いやです！離したら、エルベリート様は行ってしまうからっ。」
「そんなに掴まれたらオレが迷惑だよ。離せよ。」
迷惑、という言葉にアゼレアが漸くその手を離した。

「で、そのアゼレア様が何の用？」
エルベリートは腕組みしながら、アゼレアに問いかける。
「わ、わたし、エルベリート様が好きです。」
「そう。」
エルベリートはアゼレアにあまり関心がない様子。

「わたしはあなたにずっとお会いしたくて
兄からエルベリート様がここにいると知り、
わたし自身も兄と共にここに住ませていただくことになりました。」
「ヒューレイスト様の妹なのは知ってるよ。会って話すのは今日が初めてだよね。」
「わたしとお付き合いしていただけませんか。」
アゼレアはエルベリートに告白する。
「・・・オレは好きな人がいるから。それはできないよ。」
そういえば、諦めるとエルベリートは思っていた。
「・・・好きな人ってリ・・・あのメイドの女ですか?!」
しかし、アゼレアはエルベリートに食ってかかってきたのだ。
「リネア?ちがう!なんでオレがあんなメイドを!誰だっていいだろ!!
あんたには関係ない!!」
すかさず、言い返すがアゼレアにさらに拍車がかかってしまう。
「関係なくありません!!」
アゼレアは華奢な外見とはうらはらに、ここぞとばかりの芯はかなり強い。
「話すのだって初めてじゃありません。私のこと覚えていませんか。」
「あ・・・・。」
顔をはっきりとは覚えていないが、どこかで会ったことがある。
「どうして・・・君がここに・・・。」
先ほどの態度とは打って変わり、エルベリートは優しげな瞳でアゼレアを見つめる。
「・・・お会いしたくて来ちゃいました・・・。でも
エルベリート様はご迷惑なんですよね・・・。
あの、3日だけお付き合いしていただけませんか。
せめて、3日だけでいいのです。」
アゼレアは涙を浮かべて懇願する。

「いや・・・、じゃあこうしよう。3日だけ考えさせて。
いきなり言われても返事はできない。
アゼレアもオレで本当にいいか考えてみてよ。
・・・3日だけ、なんて寂しすぎるだろ・・・。」
エルベリートはぼそっと呟いた。
「有り難うございます。わたしの気は変わりません。
いいお返事をお待ちしています。」
アゼレアは精一杯の笑顔を作り、その場を去っていった。

その夜、エルベリートはアゼレアのことを考えていた。
彼女が去る間際に見せた笑顔が脳裏に焼きついて離れない。
次の日も、その次の日も・・・。
けして、その性格ゆえ、口にはしないがエルベリートは
そうとうアゼレアを気にかけているようだ。

そして、3日後がやって来た・・・。
エルベリートがアゼレアの告白の返事をする日である。

その日は曇天で何ともはっきりしない天気だった。
エルベリートはアゼレアの告白の返答を胸に薔薇庭園のある中庭へ
と向かった。
「いたっ！」
途中で誰かにぶつかってしまったが急いでいたためエルベリートは
謝りもせずに
駆け抜けてしまう。
ぶつかった女の正体はリネアであった。
「・・・なによ、エルベリートからぶつかってきたのに謝りの一つ
くらいあったて・・・」
少々怒りの混じった低い声。

リネアは服の埃を払うとエルベリートとは別の方角へ去っていった。
この天気のせいだろうか。今日はなんだか薔薇が元気のないように見える。
「今日はどんよりしたお天気ですわね・・・。バラ達がこんなに元気がないなんて・・・」
先に来ていたアゼレアが薔薇に触れながら呟く。

エルベリートはアゼレアの姿を見かけると駆け寄って来る。
「アゼレア、早いね。」
近くまでエルベリートの足音が聞こえたため、アゼレアは気付いたようでエルベリートの方を見た。
「エルベリート様、大丈夫ですか。ごめんなさい。走らせてしまって・・・。」
アゼレアは自分が早くに到着していたことでエルベリートを急がせてしまったことを
申し訳なく思い、下を俯く。
「ううん、大丈夫だよ、走るのはこれでも慣れているんだ。」
「私も少し前に来たところです。時間がありましたので薔薇を眺めていました。
でも、何だか元気がないみたいで。」
アゼレアが不安そうに薔薇を見つめている。
・・・薔薇・・・？ああそうか、ここは薔薇庭園だったね。確かに毎年見事なものだよ。
でも、元気がないって言われてもオレにはあまり変っていないように見えるんだけど。
アゼレアが薔薇を気にかけているようなので、エルベリートもそんなことを考えながら、近辺の薔薇を覗き見るが特に何も変らない。
しかも、これを身につけたらオレがさぞや優雅に見える。
薔薇は優雅なオレのイメージに相応しいな、などと場違いなことを

考えていた。
「確かに少し元気がないように見えるね。きっとこの天気だからだよ。アゼレアが心配することは何も無いと思う。でも、君は優しいね。」
アゼレアはエルベリートの言葉に頬を赤らめる。
「有難うございます。・・・そうですよね。わたしったら薔薇に夢中ですっかり話をはぐらかしてしまうところでした。エルベリート様、宜しければ、先日の告白のご返答をいただけないでしょうか。」
「え、え・・と。あの・・・オレは・・・。」
アゼレアに見つめられてエルベリートはさっきまでは答えがもう出ている返答が今になってすんなり出てこない。こんなのかっこ悪いじゃないか・・・。
「エルベリート様？」
アゼレアが答えに窮しているエルベリートになにかしら言葉をかけようとする。
ここまで、来たんだ。
ここで言わなきゃ、3日間、彼女のことが脳裏に焼きついて離れなくて仕事は何とかこなしたけど、
気まずさからヒューレイスト様のお顔もあまり見られなかったし・・・。
―言おう。
ここではっきりと。
エルベリートは照れから目を反らしたくたくなる気持ちを振り切ってアゼレアを見つめなおす。
「・・・オレ、あんたと付き合ってみてもいいよ。」
「えっ・・・？」
アゼレアは一瞬、耳を疑うが、エルベリートの表情から真剣さが感じ取られ、
事実と察し、ニコリと微笑んだ。

「有難うございます。良いご返事を頂けて嬉しいです。」
嬉しさで胸がいっぱいになり、そういうのがやっとだった。
「・・・オレも多分君のこと好きなんだと思う。ここ3日間、君のことが
頭から離れなかったし・・・。はは、オレらしくないよね。」
エルベリートは少し苦笑いしながら、頭を掻いた。
アゼレアはそれを茶化すこともなく、エルベリートに身を寄せた。
「嬉しいです・・・。エルベリート様にここまで想って頂いてわたしは
果報者ですね。」
「そんな、オレはそんなたいした奴じゃないよ・・・。」
エルベリートにしては珍しく謙虚になっていた。
アゼレアの肩を優しく抱き、庭園を歩いた。
ここに来て間もなく兄がいるとはいえ、そのヒューレイストは仕事で多忙のため、妹を顧みることがなかなか出来なかった。知らない人ばかりで不安なアゼレアを
安心させるためエルベリートは明るく振舞った。

二人は庭園にあるベンチで会話している。
会話の内容はまだ、会って間もないため、たわいのない世間話だ。
ぽつぽつ・・・。
空から零れる雫がエルベリートの頬を掠める。
冷たい・・・。何だろう。雨か・・・。
アゼレアと少しずつ打ち解け楽しい時間を遮るかのように雨が降り出した。
「まあ・・・。雨が降って来ましたね。確か今日は1日中曇り空と聞いていましたのに・・・。
わたし、傘を持ってくるのを忘れてしまいましたわ。」
「オレも持って来てない。・・・。ここって結構、城から距離あるのだよね。濡れないといいけど・・・。」

「お城に戻ったほうがいいですよね・・・。え、え・・・とわたしの部屋に来ませんか。
あ、でも・・・。お兄様が許してくれるかわからないですわ・・・。」
「・・・・・。」
どこか、雨宿りできるところは無いかとエルベリートは思考をめぐらせていた。
確か、庭園から少し離れにテラスがある。屋根もあるし、休憩中に一人になりたいときはよくそこを利用して読書したりしていた。また、メイドたちがおしゃべりを楽しんでいたりもする。リネアも同じメイド仲間のニーチェと一緒にそこで昼食をとっていたのを見かけたりもした。
エルベリートは住み込みで勤務してから2年間ぐらい、城のことや設備については精通している。入ってすぐに意気投合した、アークフォルトの弟のセシオスともいまや良い親友だ。
「あるよ、アゼレア。雨が降ったときでも凌げそうな場所が。オレに着いて来て。」
エルベリートはアゼレアの手を引き、駆け出す。

雨は徐々にひどくなり、途中でアゼレアはエルベリートの速さに追いつけず、持病もかかえていたため、立ち止まって咳き込んでしまう。
「アゼレア、大丈夫?!」
エルベリートがアゼレアの異常に気付き、走るのを止めた。
手を貸そうとするが、アゼレアがエルベリートに心配かけたくないと無理な笑顔を作り頑なに断る。
「先に行って下さい！わたしは大丈夫ですから！」
だが、目の前に苦しんでいる人がいるのに放っておける置けるわけがない。
エルベリートはそんな人情は持ち合わせている

咽込む彼女の背中を優しくさすってやると少しは楽になってきたようだ。
「ごふごふ・・・。ごめんなさい・・・。
エルベリート様のお召し物まで濡れてしまいますね・・・」
「いいんだよ。気にしないで。アゼレア、少しは楽になった？・・・・
ヒューレイスト様を呼んでこようか。」
ヒューレイスト、アゼレアは自分の兄の名に拒否の言葉は大きくなった。
「だめです！お兄様にはお知らせしないで下さい！本当にっ大丈夫ですから！」
「・・・でもっっ！」
「いいんです！こんなのいつものことです！お兄様はアークフォルト様にっごふごほっ」
「もういいから、喋らないで！咳がひどくなる！」
苦しいのに我が身を顧みず、アゼレアがあまりにも拒絶するので、
エルベリートもヒューレイストを呼ぶのは止めて、
この雨を凌ぐためにテラスへと足を急ごうと考える。
アゼレアも少し呼吸が落ち着いたようだ。
「もう大丈夫です。テラスへ急ぎましょう。このままじゃエルベリート様まで風邪を引いてしまいます」
「あまり、無理はするなよ。苦しかったらすぐに言って。」
エルベリートはアゼレアを支えながら薔薇庭園を後にした。

二人がテラスに着いたのは、約１０分後くらいだった。
いつもなら5分位で辿りつけるものの、この大雨で視界が遮られ、
身体の弱いアゼレアを支えながら歩いていたためだ。
「ふう、やっと着いたね。」
「ごめんなさい・・・。すっかり濡れてしまいましたね・・・。お洗濯でもしてお召し物はお返ししますから・・・。」
アゼレアがエルベリートのジャケットに触れながら悲しい目をする。

「そんなこと、君は気にしなくていいよ。家事はメイドの仕事だから。」
「そんな・・・。わたし、こう見えても家事とか得意なんです。せめてお洗濯してお返ししたいんです。」
エルベリートは根負けして、アゼレアに甘えることにした。
「じゃあ・・・。お言葉に甘えるよ。でも、替えはあるからいつでもいいからね。」
「はい！」
アゼレアは嬉しそうに返事する。
エルベリートは一息つき、アゼレアとの会話を楽しんだ。
「ここのテラスは、オレがよく読書したり、ちょっとした休憩に利用しているんだ。
静かで落ち着くんだよね。」
アゼレアはそんなエルベリートの話を興味津々で聞いている。
「エルベリート様って何を読まれるのですか。」
「最近は仕事で使う書物しか読んでないけど、文学書とか、推理物とかかな。」
「そうですか。わたし、わたしも読書好きなんです！小説とか心があったまる物語が好きなんです。」
「ふうん。そう。」
エルベリートが言葉を止めたため、アゼレアは自分の話が面白くないと思い、話題を変えようと試行錯誤するが言葉が出て来ない。
エルベリートは気分屋で、付き合うには結構扱いにくい。セシオスのような口から生まれたようなお喋りであるか、リネアのように自分をけして曲げない頑固者かでないと
会話に困ってしまうのは仕方のないことだった。

「小説って、最近は恋愛物とかいろいろあるよね。」
先に口を割ったのはエルベリートだった。
「・・・えっ！ええ！わたし、恋愛小説とか好きで、中でもハーク

インシリーズとか本当に憧れてしまいます。」
「ああ、あれは王道だよね。」
「ええ！・・・っとごめんなさいっ。張り切ってしまって。エルベリート様は他にはどんな趣味をお持ちですか。」
「・・・ピアノが好きなんだ。暇があれば弾いてる。実はこっちが趣味。」
「えええっ！」
ピアノが趣味と聞き、アゼレアは驚く。規律に厳しいエルベリートのことだから
仕事が趣味とか読書とか言うだろうとは考えていたが。まさか、ピアノが趣味とは。
「何か、おかしい？」
「いいえ、とんでもありません！素敵です！」
「そう。一応、オレはピアノではピアニストの腕も持っているよ。最近は仕事で忙しくてかまけていられないけど。」
「すごいです！まだ、お若いのに４幹部としてご活躍されているだけでも
尊敬しますのに、ピアニストだなんて・・・。」
「・・・過去の話だよ。・・・・・・。」
「過去？」
「・・・・・ごめん・・・。」
アゼレアはここから先が気になったが、エルベリートが口篭ったため、話題を変えることにした。
「えっと、雨は少し小降りになりましたね・・・。」
「うん、今のうちに戻ろうか。いつ大雨になるかわからないしさ。」
「そうですね。」
さっきの雨脚は弱くなり、小雨になったようだ。
エルベリートとアゼレアは城に戻っていった。
だいぶ小雨になったおかげかあまり濡れずに済んだようだ。
エルベリートはアゼレアを部屋まで見送り、「濡れた服はあとで渡

すから」と言い、
その場は別れた。

エルベリートの予測は的中し、雨脚は再び強くなり、エルベリートたちが薔薇庭園でデートしていたときよりも一層酷くなる。
「また、降り出したんだ・・・。良かった、帰ってきて。」
エルベリートは窓を叩きつける雨音を聞いて呟く。
「エルベリート、ちょうど良かった。」
偶然、通りかかったヒューレイストに気付き、エルベリートは振り返る。
「ヒューレイスト様。」
「急ぎの仕事が入った。悪いが、おまえにも手伝ってもらいたい。」
「了解致しました。雨に降られ、服が濡れてしまいましたので着替えてからすぐ向かいます。
執務室で宜しいですか。」
「ああ。・・・すまないな。休みのときに。」
「いいえ、とんでもありません。」
エルベリートは軽く会釈する。
「では、私は先に戻っている。」
ヒューレイストは執務室へ向かった。

雨はいまだ、降り続けている。勢いをまし、稲妻まで轟いていた。
屋上はすっかり雨ざらしになっている。
そんな日は誰も近づかないはずだった。
そこに人影が佇んでいる。薔薇庭園にいるときからエルベリートとアゼレアを
ずっとここから見下ろしていたのだ。
身体を打ち続ける雨粒にも轟く雷にも平然としている。
全身を漆黒のローブで覆い、
そのいでたちはまるで西洋の死神を連想させる。

顔はローブで隠れているため、よくわからないが不気味なことには変らない。
「ふっふふっふふふふふふふふふ・・・。」
「こんなところに隠れていたとは、な・・・。」
「・・・やっと、見つけましたよ、貴方を！」
その唇から放たれた言葉からだけでは男か女かもわからない。
その後、ローブを翻し、そのローブの者は姿を眩ました。
雨はまだ、止まないが、気のせいかローブの者が消えたと同時に少しおさまったようである。
大きな稲妻が轟いたとほぼ、同時に・・・。

―第1章―
―完―
―第2章―
予兆へ続く。

第2章　予兆（前書き）

長らく停滞してすみません！また小説再開します。

～あらすじ～

アゼレアの告白を受けお付き合いする事になったエルベリート。そんな中新しい従者が二人仕える事になり、リネアにも波乱の予感が的中する。

第2章　予兆

昼下がり。昨日の雨は嘘かのように晴れている。昨日はあの後ヒューレイストに急用で呼び出されたエルベリートであったが、大量の書類を二人掛かりで処理するのに夜中までかかり寝不足である。ヒューレイストには今日は半休で良いと言うお言葉に甘え、珍しく昼過ぎまで爆睡していた。

エルベリートはベッドで眠気眼を擦りながらサイドテーブルの目覚まし時計に目をやる。時計の針は既に１２時を指していた。

「あ。」

「もうこんな時間か。」

バタン！

ガラガラガラガラ・・・

エルベリートが洗面所に向かい、顔を洗いタオルで顔を拭いていると耳障りな騒音が彼の耳に入ってくる。装飾の施された洋服ダンスを開け正装を取り出し、エルベリートは寝巻きから着替えて身支度を整える。

「すみません！昼食を只今お持ち致します！」

昼食を載せた配膳ワゴンを押す音が乱暴に止まり、今から紅茶をいれまいと慌てふためくリネアがいた。

これはいつもの茶飯事。エルベリートがいつも部屋で朝食を取るのでメイドのリネアは配膳ワゴンに朝食を運び込み、配膳するのが仕事だが今日はエルベリートが寝坊した為、時間が読めずあたふたしている。

エルベリートは食事用のテーブルに備え付けられた椅子に腰掛ける。

「ええとこれは確か・・・」

リネアがもたもた用意を手間取りエルベリートは何だか無性に腹が

立ってきた。

「もういい！全く何でオレが起きる前に全く用意が出来てないんだよ。もうリネアは勤めが二年だよね？いい加減に紅茶ぐらいまともに煎れられないの？」

リネアの手がぴたりと止まる。

「・・・っ」

何か言いかけそうに見えたがさっきのリネアとは別人のようにさっさと紅茶を煎れ昼食をエルベリートの前に差し出す。

「どうぞ。お食べになってくださいませ。」

エルベリートは一瞬リネアの作業の速さに目を疑った。

「なんだよ。やれば出来るじゃないか。」

「頂きます。」

出された昼食はクラブハウスサンドイッチとサラダ、ミルクティー。ナプキンで手を拭き、先にミルクティーに口をつける。

「うん、おいしい。後は支度さえまともなら文句はないんだけど。」

「有難うございます。エルベリート様にお褒めに預かり光栄です。」

リネアは深々と頭を下げる。

そして頭を上げると昼食を取るエルベリートを見て、少し悲しげな表情を浮かべたが思い留まり、軽く会釈し配膳ワゴンを押しながら部屋を出て行った。

「・・・」

「何だよあいつ。変な奴。」

エルベリートはミルクティーを飲みながら、クラブハウスサンドイッチやサラダもたいらげるとテーブルに食べ終わった食器を重ねた。ナプキンで手を拭き、席を立った。

コンコン

「はい」
「エルベリートのねぼすけ～」
明るい声が扉の向こうから聞こえる。
「・・・セシオス。お前こそ賑やかだな。」
エルベリートが扉を開くと左右に跳ね上がった髪をした気さくな少年がいた。年齢はエルベリートと同じ位に見える。
「賑やかっていうかもう昼だぜ？賑やかでも悪くねえだろ。」
セシオスはちょっと呆れ顔でエルベリートを見る。
「悪いな。昨日の仕事が立て込んでてさ。」
「そうか～ってお前昨日休みだったろ。それより最近リネアちゃん元気ねえよな。」
「そうだけど。実は昨日夜ヒューレイスト様に呼び出されてさ。・・・リネアの事は知らないよ。オレは。」
エルベリートは目を反らす。
「そっか。さっきリネアちゃんとすれ違ったけど元気なくてよ。」
「ふうん。そう。」
セシオスは一瞬「リネア」と聞いたエルベリートが訝しげに眉をしかめた事に目を疑った。そして彼から見たエルベリートのその瞳に冷酷さ、さえ見受けられる眼差しに変化していた事を。
「さあて行こうか。」
エルベリートは元の表情に戻っていた。自室を出て長い廊下を二人歩きだす。
「お。おう！確か今日は新しい奴らが入って来るらしいぜー」
セシオスはエルベリートの表情がいつもと変わらない事に先ほどの表情はきっと気のせいだと思い直し、わざと明るく振る舞った。
「セシオス、誰なんだよ。」
「おう・・・」
「その新入りさんってさ。」
エルベリートはどうも気になっている。今日からラクノア・ヴァロ

ス城に仕える新しい従者達を。
「確か、女が二人らしいぜ。何でも一人は」
エルベリートがセシオスと話している最中、ヒューレイストとすれ違う。彼は二人の女性を引き連れていた。
「ヒューレイスト様。おはようございます。」エルベリートが挨拶するとヒューレイストは会釈で返答する。
「おはよう。ヒューレイスト。」
セシオスも軽く挨拶。彼はアークフォルトの弟なのでヒューレイストの主に当たり敬語は使わない。
「おはようございます。セシオス様。後でこの二人を紹介せよ。とアークフォルト様におおせ付かりましたので広間にお集まり下さい。」
どうやらこの二人が新しい従者ならしい。
ヒューレイストと二人の女は軽く会釈して先に広間に向かう。
エルベリートとセシオスも後から押し越し広間に向かった。

ラクノア・ヴァロスの広間はかなり規模がある。中には既に沢山の近衛兵や兵士達、使用人達が控えている。
エルベリートとセシオスはラクノア４幹部用に用意された椅子と長テーブルがありその左側からヒューレイスト、セシオス、エルベリート、リムが腰掛ける。

「なあ、さっきの二人ともかわいいよなあ～ちびっこリムと違ってよ。」
セシオスが茶化す。
彼はエルベリートの隣だ。
「リムはちびじゃないもん。」
エルベリートの右側からボソッと呟く声。
控えめな大人しい少女が俯いている。

「やめなよ、セシオス。」
エルベリートがリムの頭を軽く撫でてやる。
「へええい。」
セシオスが舌を軽く出して両腕を頭の後ろに組んだ。

「皆の者、静かに。」
ヒューレイストの声で辺りがさっきまでざわめく空気が一瞬で静寂に変わる。
「紹介しよう。本日よりこの城にお仕えするメレニー・フェルトとソーニャ・ビアンディだ。二人とも順番に自己紹介しなさい。」

「はい！」
ヒューレイストの右に女達は横並びだったが先に返事したのは右側の女だった。

「はい！」
「メレニー・フェルトです。」
ウエーブのかかったセミロングヘアーの女が名乗りお辞儀すると広間の空気はまたざわめく。

「メレニーってあのカリスマダンサーのメレニーだよね？」
エルベリートもセシオスにこそこそ問いかける。「おう、確かラ・セレベージュっていう人間とエルフが1部共存している世界では有名人らしいぜえ。」
「ふうん。」
エルベリートがセシオスからそんな話を聞きメレニーに目をやると、ウインクされた。

「皆さんの考えていらっしゃるダンサーのメレニーはここでは踊り子としてお仕えする事に致しました。どうぞお見知りおきを。」

「スゲー本物だぜ。」
「これからはメレニーちゃんが兵士達の休息を与えてくれる。」
「ああ、ラクノア万歳」
歓喜の声が広間を覆う。
「こほん」
「アークフォルト陛下。」
ヒューレイストの左に後から来たらしいアークフォルトが近衛騎士を従え立っている。
ラクノア王らしく正装に身を包んでいるが余り堅苦しい衣装ではなく動きやすい王子のような衣装だった。
「ヒューレイスト、ご苦労だった。ここからは私に任せるがよい。」
「はっ、御意。」

「ではメレニーの優雅なる踊りを見せて見るがいい。」
アークフォルトがメレニーに指示をする。
「有難うございます。陛下。では失礼致します、このメレニーのダンスをしばしお楽しみ下さいませ。」
メレニーは会釈すると軽いステップを踏みながら、踊り始める。

それは見る者を魅了する甘美なダンス、エルベリートも雑誌では見たことがある。確かちゃらちゃら男がパートナーだった記憶があるが、彼女の踊りを目前に拝む事は初めてだったためすっかり見入ってしまった。
「スゲーよなあ。兄貴もあのメレニーを引き入れるなんてよ。確か男のハールベリトは有名人だったけどよ、どっか留学したらしいぜー」
「ふうん、ハールベリトか・・・」
パチパチパチパチパチパチ・・・

メレニーのダンスが終わり盛大な喝采が送られる。
正にカリスマダンサーそのものだった。
エルベリートとセシオスも遅れながらも拍手を送る。

「次はソーニャ・ビアンディだ。彼女はヒューレイストの付き人として臨時だが仕える。」
先ほどとは全く違う雰囲気のマントを纏う全身黒ずくめの女。
ステージに歩みだすとマントを剥ぎ取りえんび服になり、長い髪をなびかせながら大鎌を構える。周りが恐怖にどよめく。
「あたいはヒューレイスト様の付き人が一人、ソーニャ・ビアンディだ。宜しくな！」
恐怖を拭うためソーニャは活気ある挨拶をし、大鎌をくるくる回しながら華麗に舞う。
派手なパフォーマンスだった。

「カッコイイ・・・」
「え。」
呟いたのはリムだった。エルベリートはおどける。使用人の列ではリネアとニーチェがソーニャに見とれていたようだ。
ソーニャのパフォーマンスが終わると拍手はとぎれとぎれに聞こえやがて盛大に変わる。彼女のパフォーマンスは最後まで派手に幕を下ろした。
「二人ともご苦労だった。皆の者、そそうのないようにな。」
アークフォルトが紹介を終えると二人の少女はヒューレイストに連れられて退場した。
アークフォルトがしばし話してこの場は終了となり各自持ち場に戻る。
今日半休であり午後から奉公であるエルベリートと朝から奉公のセシオスは同じ執務室で仕事する。

扉を開けるとヒューレイストがエルベリートを待っていたようだった。

「ヒューレイスト様」

「エルベリート、ソーニャに城の案内をしてやってほしい。」

ヒューレイストがエルベリートにソーニャを任せて自分の職務に戻っていく。

「はい、了解致しました。ソーニャ、ここからは私がご案内します。」

エルベリートがソーニャに手を差し出すと彼女は軽く会釈して丁重に断る。

「お手は結構です。エルベリート様」

「わかりました。では参りましょう。」

エルベリートはソーニャを引き連れ、執務室を出た。

長く続く廊下を歩きだす。

エルベリートはソーニャの頑なな表情を時折気にしながら案内を始める。資料が多彩な為よく使用する大書庫を始め、食堂や中庭等、使用頻度の高い場所を次々と案内して行った。

新参者にはこの位案内すれば後は時と場合によって教えて行けば良いとエルベリートは考えていた。ガイドとして役割は果たせたはずだ。

ソーニャが突拍子のない事を要求して来るまでは。

「エルベリート様、屋上へは向かわれないのですか？地下室へは？」

え？

屋上や城の中でも知られされている者が少ないという、地下室の事まで？

エルベリートは一瞬、頬に額から流れる冷たいものを感じた。

実はエルベリートさえ勤めは二年半になるのに地下室の事は詳しく知らされていないのだ。
ソーニャは間が悪いと感じ、エルベリートを見つめて眉を潜めた。
「・・・わからないなら先ほどの言葉は失言と受け取ってください。失礼致しました。」
「あ、いやオレこそ役不足ですまない。」
エルベリートは余りにもソーニャが物憂げな表情をしている事に何かかえって申し訳ないと思い非礼を詫びる。
「いえ、お気になさらずに。」
「…ソーニャってさ、本当は明るくてサバサバした女性に見受けられたけど。」
大広間で見せたソーニャの派手なパフォーマンス時の大胆不敵なイメージと今のまるで別人のような素っ気ない彼女のギャップを感じていた。不自然だな。と。
ソーニャはエルベリートにはまだ心を開いてくれる様子はない。
ふう。とため息が出る。
「ソーニャ、年も近いと思うし仲良くやろう。」
エルベリートがソーニャに微笑む。

内面は。
何だ、この女。
扱いづらいんだよ。
あの派手なパフォーマンスのあの不敵な笑みはどこに消えたんだよ。
ったく…。

そんな事を考えていたが顔には出さず気の良い少年を演じていた。
「申し訳ありません。あの時はちょっと羽目を外し出過ぎた真似をしてしまいました。」
ソーニャが俯きながら呟く。エルベリートはこれ以上話しても埒が

明かないと考え話題を変える事にした。
「ソーニャのポジションってさヒューレイスト様の執事だよね？」
「ええ。」
「女性がえんび服って不思議だけど良く似合ってるよ。最初男かと思った。」
…何でラクノアは男性社会なのに女がえんび服なんて着てるんだよ。ヒューレイストの執事だなんて所詮メイドに毛が生えた程度だろ。身の程を知れよ。
エルベリートのソーニャに対する言葉はそんな考えとは裏腹に次々と場をもり立てる為言葉を重ねていた。
「有難うございます。エルベリート様も正装が良くお似合いで。」
ソーニャが不自然な笑みを浮かべている。
「ああ、有難う・・・。」
二人の会話は更にぎこちなくなり、無口になっていった。
暫く無言のままエルベリートはソーニャと歩いていると、向こうから賑やかな会話が聞こえて来た。
「あ～だから、お前はオレ様の事何で馬鹿呼ばわりすんだ？」
「馬鹿はバカでしょ！あなたがアークフォルト様の弟だなんて信じられない！」
セシオスと今日新入りのメレニーだった。
あーあ、また賑やかだなあ、少し羨ましいよ。
エルベリートはセシオスとメレニーを微笑ましげに見つめている。
「あ、」
「よう、エルベ…」
「あんた邪魔よ！」
エルベリートに手を振るセシオスを押し退けメレニーが近づいて来

た。
「ねえ！貴方がアークフォルト様の弟よね！」
は？何を言ってるんだ。
この女は。
「いや、オレは４幹部の一人だけどアークフォルト様の弟はセシオスだよ。」
エルベリートがさらりと切り返す。
「ほら、見たか！オレ様はラクノアの王子なの！」メレニーはぽかんとしているが急に後退りし、素っ頓狂な声を上げる。

「えええええええええええ？！」
「嘘でしょう！だってこんなバカ男よ！」
メレニーがセシオス引き寄せエルベリートの前に立たせる。
「だから、オレ様はアークフォルト兄貴の弟なの！」
「わかってるよ、セシオス。メレニー。まさかそんな事で騒いでたの？」
「だってどうみてもエルベリートが相応しいじゃない。」
「オレが王子なんて無いからさ。」
メレニーを宥めていると微かに笑う声がした。

「…くすくす…そうだったな。」
声を辿ると視線の先にはエルベリート達の背後を歩いていたソーニャがいる。空耳だろうか。

「ソーニャ、今何か言った？」
「…いいえ。」
相変わらずの無機質な声。

第2章　予兆（後書き）

すみません！まだまだ続きます。見直したところ文節とかかなり読みづらかったので編集しながら追記しました。
意味が違う日本語も混ざっていたので訂正も加えました。
文才乏しくてすみません・・・。今後も読んでいただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6437i/

碧玉色の王子と赤き魔女

2011年2月3日14時30分発行